

前回は、冠詞の持つ「認知機能」と「談話機能」という雲をつかむような話に終わってしまったと反省しているので、今回はもう少し具体的な話をしよう。

前回でも少し触れたが冠詞の名称は要注意である。文法ではだいたい「不定冠詞」「定冠詞」「部分冠詞」と三題嚙のように並べられているが、これに引っかかって誤解する学習者が多い。談話機能から見れば冠詞には不定と定しかない。それ以外に部分冠詞というものが独立に存在するような教え方はまちがっている。談話機能から見れば不定である冠詞が、認知機能によって「不定冠詞」と「部分冠詞」にさらに区別される。だから流通している冠詞の呼び方は、談話機能と認知機能という、本来コトバの働きから言うと別のレベルに属している区別をごっちゃにしているのである。これが誤解のもとになる。だから冠詞の分類は、右のように改めるべきだと私は常々考えている。

こうすれば、談話機能から見れば冠詞には不定と定しかないこと、認知機能の働きがあるのは不定だけであることが、一目瞭然となる。部分冠詞と呼ばれているのは、非可算用の不定冠詞なのである。

		談話機能			
		不定		定	
		単数	複数	単数	複数
可算	男性	un	des	le	les
	女性	une		la	
非可算	男性	du		le	
	女性	de la		la	

### 「数えられる」とはどういうことか

さて、今回取り上げるのは冠詞の認知機能である。コムズカシク「認知機能」と呼んだのは、不定冠詞と部分冠詞で表現される意味の切り分けのことである。文法では不定冠詞は可算名詞に、部分冠詞は非可算名詞に用いると説明される。その通りであり、文句の付けようがない。だがどんな文法も、どれが可算名詞でどれが非可算名詞かは教えてくれない。やむなく辞書に助けを求めようとしても、辞書も冷たいそぶりだ。『プチ・ロワイヤル仏和辞典』(旺文社)が第3版から可算・非可算を表示しなくなったので、現在国内で販売されている学習辞典でこの情報を載せているものはない。ただひとつ、ユニークな編集方針の『白水社ラールス仏和辞典』が可算・非可算を表示しているが、見出し語数 5,000 に限られているので、載っていない単語もある恨みが残る。私が愛用しているのは、フランスで出版された子供用の絵本である。それを見るとハウレンソウ des épinards は可算、ブドウ du raisin はふつつ非可算であることがたちどころにわかる。相手は子供なので、四の五の言わずいちばんふつ々の使い方を載せているところが、単純明快で清々しい。しかし、なぜハウレンソウは数えられ、ブドウは数えられないのだろうか。ハウレンソウはひと束ふた束と数えるのか、ブドウはひと粒ふた粒と数えられないのか、ふつつと疑問が湧くのだが、答えてくれる文法書はない。呼べども神は沈黙すである。

教室でよく使われる説明に、「ふたつに割っても元の性質を保っている物は非可算、そうでないものは可算」というものがある。自転車を金ノコでふたつに切ったら、もう乗ることはできない。だから自転車 une bicyclette は可算である。コップ1杯の水は、ふたつに分けて2杯にしても同じ水である。だから水 de l'eau は非可算だという説明である。しかしこの説明には致命的な欠点がある。消しゴム une gomme

はふたつにちぎっても消しゴムとして使えるが、この説明とは逆に可算名詞である。なによりこの説明では抽象名詞が扱えない。「出会い」une rencontre は可算名詞だが、出会いをどうやってふたつに分けるのか想像もつかない。

それよりもっと根本的な問題がある。この説明のしかたの裏には、「可算・非可算はモノの物理的性質によって決まる」という思いこみが隠れているからである。物理的世界におけるモノの区切りが、そのまま言語の世界に反映されるという思想である。この思想が拠り所とする言語観は、「言語は世界を映す鏡」というものだ。この考えが誤りであることは、20世紀の初めにソシュールという偉い言語学者がすでに示している。ソシュールは、言語は物理世界にあらかじめ設けられた区切りを反映するのではなく、もともと物理世界に区切りはなくもやもやしたものであり、言語の方がそのもやもやに切れ目を入れるのだと考えた。

### 可算と非可算の境界線

なぜテーブル une table は数えられ、水 de l'eau は数えられないのか。その鍵は私たちが物を見るとき「有界性」にある。「有界性」とは「ここからここまで」と境界線が引かれている状態をいう。私たちがテーブルをイメージするとき、ふつうは両端があり、「ここからここまでがテーブル」という境界線のあるイメージを描く。これが数えられるということである。テーブルひとつはここからここまでという輪郭がはっきりしている。一方、私たちが水をイメージするとき、「ここからここまでが水」とイメージすることは難しい。水は形がなくその姿は変幻自在であり、どこまでも茫漠として拡がっていて輪郭がはっきりしない。これが数えられないということの原型である。それ以外のことは応用問題にすぎない。

ここで読者の頭にはいろいろな疑問が浮かんだにちがいない。よく出る疑問にQアンドA方式で答えておこう。

Q: コップに入れた水は、ここからここまでとイメージできるじゃないですか。

A: あなたがイメージしたのは、水 de l'eauではなく、コップ一杯の水 un verre d'eau です。コップに入れた水には有界性があり、数えられます。

Q: パン du pain が非可算なのはなぜですか。パン屋で売っているパンには「有界性」があり、ひとつふたつと買うじゃないですか。

A: パン屋のパンが数えられるのは、パンという物質に「製品」として輪郭が与えられたからです。だから売られているのは un pain, une baguette, un bâtard という「製品」であり、「物質」としてのパンではありません。ところがあなたが食卓で食べるのは製品ではなく物質です。だからパンはお店では可算、食卓では非可算なのです。物の見方はそれが置かれた「場」によって変わります。

Q: お金 de l'argent は「1円、2円」「1ユーロ、2ユーロ」と数えられるのに、なぜ非可算なのですか。

A: あなたが数えたのは「円」「ユーロ」で、「お金」ではありません。円・ユーロと単位化することは有界性を導入することになります。

Q: ニンニク de l'ail は常に非可算ですが、ニンニクはタマネギ un oignon と似ていて、形があり数えられそうな気がしますが。

A: ニンニクは料理では刻んだり潰して形をなくして使うので非可算です。タマネギも刻んで形がなくなると de l'oignon になります。ニンニクが認知される「場」が「畑」や「八百屋」ではなく、もっぱら「料理」であることを意味します。

他に質問のある読者は編集部まで寄せられたい。

冠詞は意味に関係する

さて、冠詞の認知機能をほんとうに理解するには、グリーンピース *des petits pois* は数えられ、米 *du riz* は数えられないということを記憶するだけでは十分ではない。可算・非可算の区別は意味の転換と拡張に深く関わっているからである。この点を理解しないと、冠詞の用法をマスターしたことになる。

意味の転換でいちばんよく知られているのは、可算の *un bœuf* 「牛」を非可算の *du bœuf* にすると「牛肉」に意味が変わることだろう。*un porc* 「豚」と *du porc* 「豚肉」、*un poulet* 「ニワトリ」と *du poulet* 「鶏肉」のように、「動物」から「肉」への意味の転換は規則的で、また比較的理解しやすい。もともとあった動物としての有界性をなくすと、物質としての非有界的な見方に変化するのである。「虎は死して皮を残す」というが、牛は解体されると肉になるのである。

非可算にすることで生まれる意味の転換・拡張はきわめて多彩である。*le soleil* 「太陽」から *du soleil* 「日光」は個体からその放射へ、*une bicyclette* 「自転車」から *faire de la bicyclette* 「サイクリングをする」は個体からそれをを用いる活動へ、*un professeur* 「先生」から *du professeur* 「教師らしさ」は個体からその性質への転換である。だから実例にお目にかかったとき、*du serpent* が「ヘビの肉」なのか「ヘビらしさ」なのかは、前後の文脈から判断するしかない。

逆に非可算から可算への意味の転換・拡張も多い。*du verre* 「ガラス」から *un verre* 「グラス、コップ」は材質から製品へ、*de l'amitié* 「友情」から *des amitiés* 「友情を表わす言葉」は感情からその現われへ、*de la hauteur* 「高さ」から *une hauteur* 「小高い場所」は抽象から具体への転換である。

非可算から可算への転換には、「複数」がからんでいることもよくある。*la solitude* は「孤独」だが、複数にした *les solitudes* は「人里離れた淋しい場所」、*la profondeur* は「深さ」だが、*les profondeurs* は「深い場所、深海」、*la pourriture* は「腐敗」で *les pourritures* は「腐ったもの」となる。フランス語には「抽象名詞を複数にすると具体的な物をさす」という大原則があるが、これは本来は数えられない抽象名詞が複数にされることで、有界性が生じるためである。

「数えられる」「数えられない」という区別は、初級文法では不定冠詞 *un* を使うか、部分冠詞 *du* を使うかの目安としてのみ教えられることが多い。これはモノ(物理世界)を出発点として、コトバの用法を理解しようとする道である。だがこれまでの話からわかるように、それは順序が逆なのだ。コトバは私たちの認知の反映である。だから自転車を非可算的に *de la bicyclette* と使ったとき、それはどのような自転車の認知を表わしているかがわかる感覚が必要だ。ふつう「椅子」*une chaise* は可算でしか使わない。サイクリングとはちがって「椅子を用いて行なう活動」というのは社会的に認知されていないからである。しかし、椅子を持ち上げてくるくる回す曲芸がもし入社試験の必須科目になったら、*faire de la chaise* という言い方はごくふつうになるだろう。大事なことはフランス語の冠詞のシステムが、このような新たな意味の拡張がいつでもできるように作られているということなのである。

(とうごう・ゆうじ)